

日本周辺海域及び北西太平洋の浮遊プラスチック類の監視

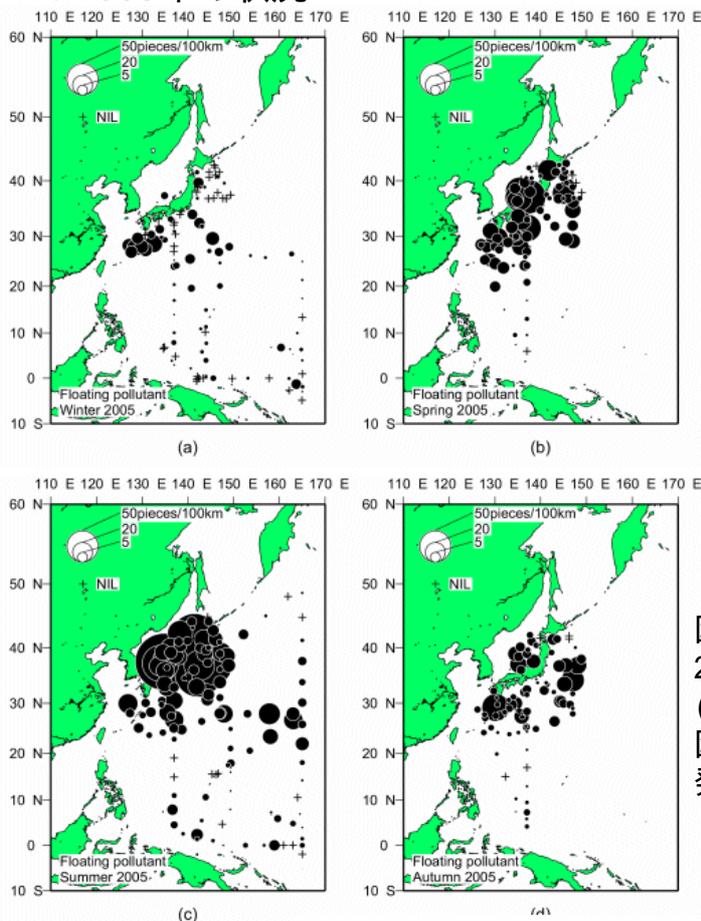
気象庁

気象庁は、海洋気象観測船により、定期的に北西太平洋及び日本周辺海域の定められた航路上で海洋気象観測を行っている。この観測ルート上において浮遊プラスチック類の観測も1977年以来継続して実施している。

以下に2005年の状況と過去資料の解析の一例を示す。

なお、これらの情報は「海洋の健康診断表」として気象庁ホームページに掲載されている (<http://shindan.mps.kishou.go.jp/kaiyou/shindan/>)。

1. 2005年の状況



- 日本周辺海域では、2005年の春季から秋季にかけて100kmあたり20個以上の浮遊汚染物質（プラスチック類）が発見された。
- 黒潮および黒潮続流域のやや南にあたる北緯30度付近の海域でも100kmあたり20個前後と、比較的多く発見されている。
- 外洋域で発見される浮遊汚染物質の多くは石油化学製品であり、なかでも発泡スチロールの占める割合がどの海域でも最も高い。

図 1-1
2005年の海面浮遊汚染物質発見個数
(a) 冬季, (b) 春季, (c) 夏季, (d) 秋季
図中の“+ (NIL)”は海面浮遊汚染物質が発見されなかったことを示す。

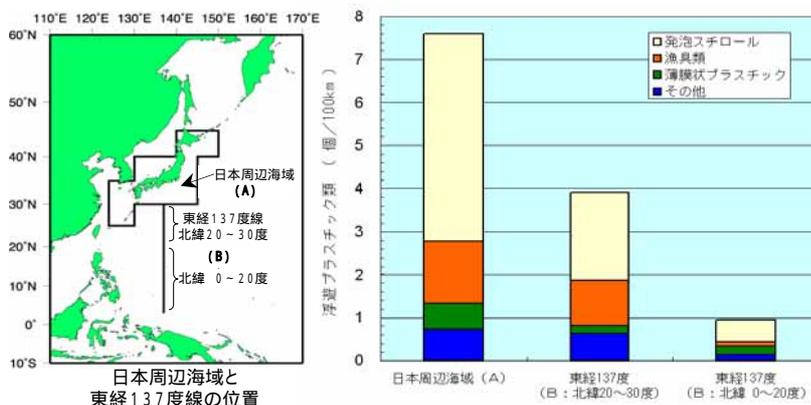
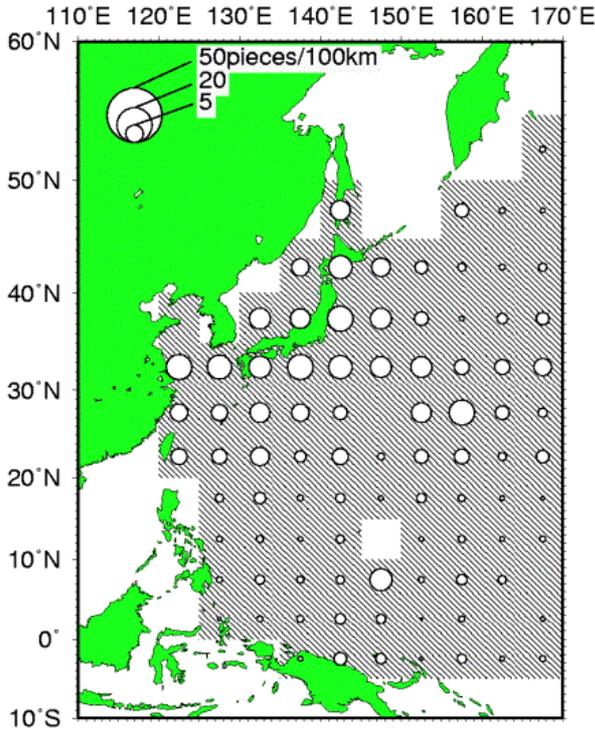


図 1-2
2005年に観測された浮遊プラスチック類の種類別の密度
(左図に日本周辺海域の範囲と東経137度線の位置を示す)

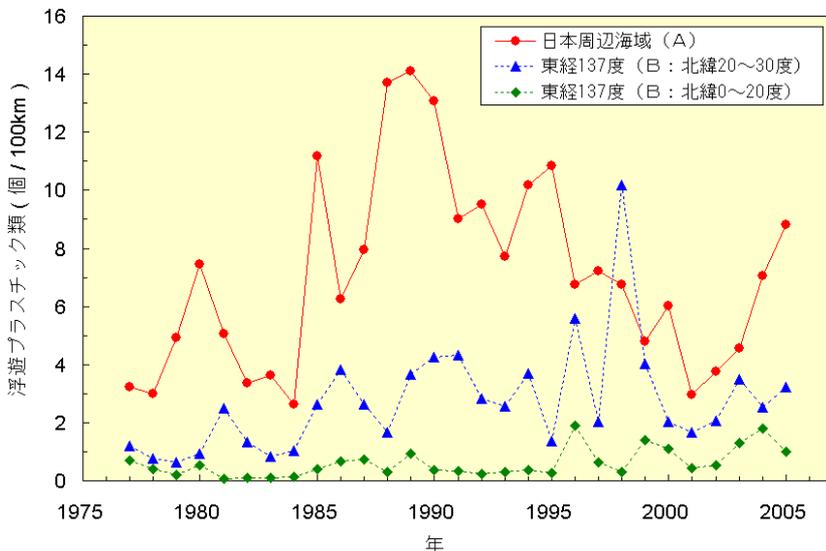
いずれの海域でも発泡スチロールの割合が最も高い。

2. 浮遊プラスチックの平均的な分布と経年変動



- 浮遊プラスチック類は北緯20度以南や亜寒帯域では少なく、日本周辺海域で多い。
- 日本列島を離れて東へと流れる黒潮続流の南側（北緯30度付近の海域）に浮遊プラスチック類が多い海域が連なっている。

図 2-1 航走100kmあたりの発見個数で示した浮遊プラスチック類の平均的な分布（1981～2000年の20年平均）

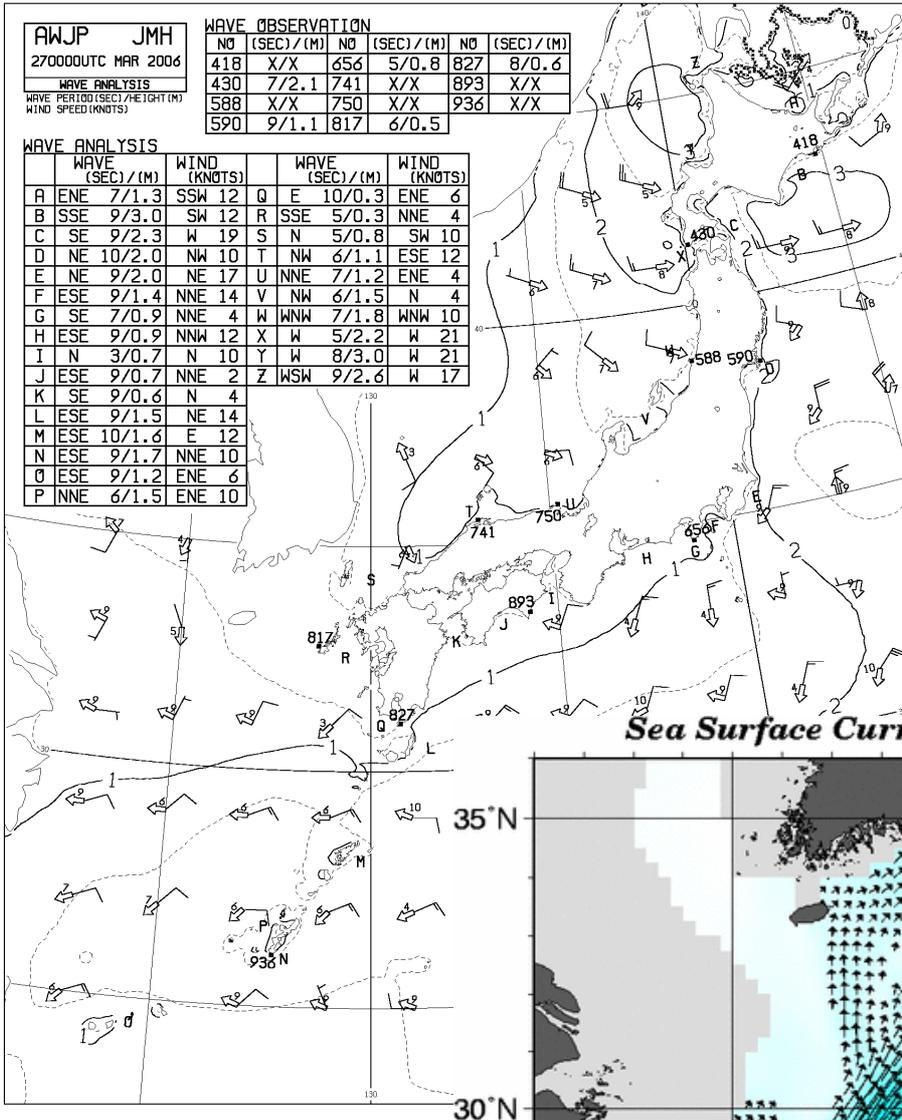


- 日本周辺海域（A）では1988年から1990年をピークとして、その後2001年まで漸減傾向となっていたが、2001年から再び増加に転じた。
- 東経137度線（B）では1990年以降も減少傾向はみられない。逆に、陸地が少ない北緯20度以南の海域で、1996年を境にしてそれ以前よりも若干増加している。

図 2-2 海域別にみた浮遊プラスチック類発見個数の経年変動（1977～2005年）

日本海の波浪・海上風・海流情報など

気象庁は、船舶・ブイ・波浪計・地球観測衛星などから得られるデータを活用した、日々の波浪、海上風、海流に関する実況解析及び予測情報を作成・提供しており、これらの情報も気象庁ホームページの「海洋の健康診断表」で公開している。



日本近海の沿岸波浪実況図

日本近海の波浪・海上風に関する解析情報等を提供している。

九州・沖縄海域の日別海流図

日本近海の海流に関する解析情報等を提供している。

